
君に、指輪を

ふも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に、指輪を

【Nコード】

N2841N

【作者名】

ふも

【あらすじ】

リズベットと結婚する意志を固めたキリト。

そのために必要な物を手に入れるために駆け回る…予定。

自分の短編小説「武器は嘘をつかない」の一応続編。読まなくても問題は恐らく問題はないです。

第一話（前書き）

リズベット可愛いですよね！

第一話

窓から差し込む日の光とともに意識が浮上を始める。それと同時に右側に今までほとんど感じることもなかった温もりを感じた。その温もりを手放したくなくて、体を右へ向けて抱きしめる。

「ん……」

そのせいで隣の温もりの主　　リズベットが覚醒し始めたようだ。

「おはよ……きりと……」

まだ寝ぼけてるのだろうか。いつもより語調が柔らかい。そう考えていると唇に柔らかい感触が訪れる。

「ん……んう……」

最初は唇を触れ合わせるだけだったが、たんだん口内に舌が侵入してきた。その心地よさにそのまま身を任せたい気持ちと、ここで目を空けた場合の反応見たさを秤にかけ、後者に軍配があがった。

目を開けると半ば夢の中のようなリズベットの半開きの目に移る自分が見えた。

と同時にリズベットの動きが止まり、顔を真っ赤になる。

「おはよう、リズ。」

「……」

「ん？もう終わりか？」

「ば……」

「ば？」

「ばかああああ……！！！」

俺は、思ったとおりの反応が見れた満足感と共に、機嫌を損ねてしまったリズのフォローをどうしようかと考え始めた。

「起きてたんなら早く言いなさいよ。」

「いや、起きようとは思っただけどまさかいきなりディープ……」

「言うな……！」

そういつて犯罪防止コードが働くか働かないかの絶妙な力加減でバシバシ叩いてくる。

「ごめんごめん。地味に痛いからやめてくれ。」

「むう…。」

納得はしていない様だがとりあえず怒りの矛を収めてくれた。これ以上掘り返す気もないので話題を変える。

「リズの今日の予定は？」

「今日中に片づけなきゃ行けない依頼は…、午前中一杯で終わるかな。午後は…その…」

キリトと一緒に…と言いながら、恥ずかしそうに視線を伏せる。その姿を眼福にしつつ自分の予定も告げる。

「じゃあ、俺は午前中はちょっと外に出てくるよ。昼飯には帰るから。」

「え？どこに行くつもり？」

「ん？ちょっとな。馴染みに結婚の報告してくる。」

本当は報告はすでにすませてあるので必要ないのだが、本来の目的を言うのは恥ずかしいのでそう誤魔化しておく。

「ふーん。分かった。」

表面上は冷静を装っているが、結婚という単語をきいたあたりで少し顔がにやけたことを俺の目は見逃さなかった。そのことを指摘したらまた一悶着あったが、それは別の話。

「さて…、どうしたものか。」

今の外出の目的は、実は結婚指輪を買うためだったりする。サプライズプレゼントにするため、先ほどは誤魔化したのだ。しかし…

「指輪って…たくさんあるんだな。」

今は手当たり次第に装備品を漁っているが、どれを元にするかなかなか決めれずにいる。軒先にならんでいる指輪群をみていると、後ろから声がかけられた。

「あ、キリト君。」

呼ばれて振り向くと、全身を白と赤を基調としたKOBの制服に身を包んだ「閃光」アスナが片手を挙げていた。

「ちょうどいいところに来てくれた。」

「へっ？」

「なるほど…、リズへあげるための指輪ねえ…。」

一通り事情を説明すると、アスナは考え込むようにした後、らしくないニヤニヤとした笑みを浮かべてきた。

「な、なんだよ…。」

「べつつに…。ただキリト君にもそんな気遣いができたんだなあつて。」

「悪かったな。で、どうなんだ。協力してくれるのか？」

自分で選んでも埒があかないと考えた俺は、たまたま通りかかったアスナに協力を求めることにした。

「うん、いいよ。大事な友達のためだし。キリト君が選んだら、最終的に食べ物になりそうなんだもん。」

「アスナのなかだと俺はどんなキャラなんだ…。」

まあ、言われなくてもアスナの顔を見るだけでだいたい分かってしまうが。苦い顔をしてそう考えていると、いきなり手を掴まれた。

「さあ、そんなことは置いといて、買い物行くよ。」

「あ、おい、引っ張るなよ。」

「じゃあ置いてくよ。」

「それも困る！」

その言葉を交わしながら、俺たちはさらなる雑踏へ踏み込んだ。

第一話（後書き）

そんな長くは書かない予定です。てかそんな長くかけない…

第二話

「で、どこに向かつてるんだ？」

「あたしがお世話になってるお店。」

アスナに引き連れられること早10分。転移門をくぐり抜け、ついた先の街でさらに進んでいるが一向に到着する気配がない。

「なあ、俺昼にはリンドースに一応戻らなきゃならんのだが…」

「もうすぐだから。ほら、そこ。」

そう指差すアスナの指先を追うと、装飾品を売っているとは思えないほど質素な店が構えられている。心配になった俺はアスナに訪ねた。

「紹介してもらってなんだけど、大丈夫なのか？」

「店主さんは気むずかしいけど、腕は確かだから。」

その言葉を信じた訳じゃないが、他に行く宛があつたわけじゃないので仕方なく店に入ることにする。

「おはようございます。」

そんなアスナの声と共に店の扉をくぐる。するとその先には椅子に座ってゆったりと寝ている妙齡の女の人がいた。

顔はアスナとは違うが、確実にきれいな部類に入ると考える。カーマインという現実離れした色の長い髪が綺麗に流れ落ちている。着ている洋服はNPCで売られている物とは比べるのも失礼と思われるほど細部にまでこだわられたものだ。しかし、客が入って着たのに寝たままなのか…。

「アシュレイさん、起きて下さい。お客ですよ？」

アスナはこの状況に慣れているのか、近づいて女性の体を揺さぶり始めた。

「うーん。あと5…」

「5分で起きてくれるんですか？」

「…5光年…」

そんな的外れの回答が聞こえてずっとこけそうになってしまった。

「5光年って、時間じゃなくて距離ですから！冗談言っただけで起きて下さい！」

アスナは懲りずに起こし続ける。そんなやりとりが5分ほど続いた後に、ようやく女性は起きたらしい。

「あー、眠い。誰、あたしの貴重な睡眠時間を邪魔したのは。」

せっかく綺麗な顔なのに、今は睡眠を邪魔されたせいか、不機嫌そ

うに歪んでいる。周りを見渡して、アスナ、次いで俺の顔を見つめた後にとんでもない発言をしてきた。

「なんだアスナか……。なあに？デート用の服を意中の彼と買いに来たの？」

そう告げられた瞬間、アスナの顔はアシュレイと呼ばれた女性の髪の色よりも赤くなった。

「ちっ、違いますよ！それに彼にはすでに相手がいますし！」

「そうなの？でも前聞いた話と違……」

「そのことは忘れて下さい！！」

どうやら女だけの秘密のやりとりがあったらしい。つつこんで聞いてみたいが、俺の目的をこれ以上遅らせる訳にはいかないので黙っておくことにする。

そんな感じでひとしきりアスナがからかわれ終わったあとに、女の人はいよいよ俺に話しかけてきた。

「アスナで遊ぶのはこれまでにして、君の名前は？」

「俺はキリト。ソロだ。」

「あたしはアシュレイ。で、君は何が欲しいの？」

気怠そうに聞いてくるアシュレイ。さっきからのやりとりを見ていると不安なことこの上ないが、一応伝えてみる。

「俺は近々結婚するんだ。そのときに贈る指輪が欲しい。」

「指輪ね…。」

そう聞いて考え込むアシュレイ。どうすべきか戸惑っていると、向こうから話を続けてきた。

「じゃ、『クリスタライト・インゴット』と、『エヴァーラスティング・ストーン』を持ってきなさい。」

「は?。」

いきなり言われた、しかも両方とも武器用の鉱石だったので指輪とは結びつかず、つい間抜けな声をあげてしまった。アシュレイはそんな俺にかまわず続ける。

「早く持ってきたらそれだけ早く作ってあげる。だからさっさと行ってきたさい。」

それを告げたきり、アシュレイはまた目を瞑ってしまった。

「は、はあ…」

呆然としていると隣に立っていたアスナから声をかけられる。

「よかったね、ちゃんと引き受けてくれて。アシュレイさんはその時の気分で断っちゃうことがあるから。」

そう言って苦笑するアスナ。俺もつい苦笑を返す。

「そのかわりとんでもないものを要求されたけどな。」

「『クリスタライト・インゴット』と『エヴァーラスティング・ストーン』だっけ？最初のはいいけど、後のは…ね。」

そうなのだ。『クリスタライト・インゴット』はまだいいが、2つ目のものは少々やっかいなのだ。どうするか悩んでしまう。

「ねえキリト君。」

「なんだ？」

「時間、大丈夫？」

「時間？」

そういつて確認してみると13:20という表示が目に入った。

「やっばい！もう帰らなきゃ！アスナ、今日はありがとう。じゃあ。」

そう言つてアシュレイの店を飛び出す。そこから自分の敏捷性を最大限に発揮してリズベットの店に走り出した。

第二話（後書き）

どうでしょうか第二話。これから他のキャラも出していく予定です。
しかしそうするとリズベットとの絡みが…。

第三話（前書き）

投稿が夜になってしまった。

明日投稿できるか微妙です（^| ^ ;）

第三話

『リズベツト武具店』に到着したのは、14時を少し回ったあたりだった。敏捷性がいくらあろうと、町の中だと半減してしまふ。リズ怒ってるんじゃないかなあ…と思いつつ、扉を開ける。

「すゝ、すゝ。」

扉の先に見えたのは、スミス専用装備のハンマーを抱えながら穩やかに眠っているリズの姿だった。思わず部屋の中に入るにも慎重になつてしまふ。起こさないようにそつとリズの傍へ近寄る。

「すー、すー。」

どうやら疲れているのか、近寄った程度では起きないようだ。その顔を間近で見ていると、ふといたずら心が湧いてしまった。

むにつ、とリズの頬を右手でつまんでみる。リズの素肌は何度か触ったことはあつたが、そういった時とはまた違った触り心地を感じる。

「ふー、ふー。」

俺が頬をつまんでるせいで少し呼吸がしづらいのだろうか。しかし、俺はやめる気にはなれなかった。今度は左手でもつまんでみる。

「ふにゆう…」

さすがに気になるのか、リズは少し声をあげた。そんな顔になつて

も一種の愛嬌があることに吹き出しそうになるのを必死にこらえる。

「きいと…、必ず…帰って…」

そんな言葉にはつとなる。この少女は夢の中でも俺のことを心配してくれているのだ。

「君は、俺が守る。」

頬から手を離して大切な少女への思いを確認する。リズが少し笑った気がした。

それから少しして起きたリズに「遅い！」と怒られた後に昼食となった。料理スキルの熟練度はそう高くないはずだが、リズの手料理はおいしかった。ありがちなことではあるが、「料理は愛情」ということだろうか。

ご飯を食べた後は最近買った二人掛けのソファに並んで座り、今日の予定を話した。話している内に別の話になり、気が付いたら夕方になってしまったのはご愛敬だろう。デートはまた今度行くということになった。

「えっ！？何日か家を空ける？」

「うん、えーと、ちょっとクエストアイテムが欲しくて。」
今はベッドの中。リズと一つの布団にくるまっている状況だ。一緒に寝るのはあの夜以来だ。

「だったら私も一緒に…」

「リズは店があるだろう？」

「だけど…。」

心配そうな顔をしているリズに笑いかける。

「大丈夫だよ。格下のクエストだからさ。」

「なにが欲しいの？買えないの？」

「…『エヴァーラスティング・ストーン』…」

「あ、あの『月夜のゴーレム』の？」

『月夜のゴーレム』とは、クエストの名前だ。満月の夜に現れる特別なモンスターを出すためのクエストで、『エヴァーラスティング・ストーン』はそのモンスターしかドロップしない貴重品だ。ちなみに、俺の今のレベルと比較すると、適正レベルは20は低い。

「な？だから余裕だって。」

「けど、あそこは『軍』が囲ってしまってるじゃない。」

そうなのだ。アスナやリズや俺が思わせぶりの態度を態度をとっているのはそれが原因だったりする。毎月この時期になると、『軍』がモンスターの狩り場を占有してしまっている。そのせいで『エヴァーラスティング・ストーン』を手に入れるためには軍から法外な値段で買い取るのが現状唯一の入手法になっている。しかし、俺は金を払う気はないので、別の手段をとることにした。

「大丈夫だ。奴らがキャンプし始めるのは2日前。明日から張り込めばあいつらの先手を取れる。」

「だとしても、いくらキリトでも7人パーティーよりダメージを出したりはできないじゃない。」

通常、アイテムの入手権はエンドアタック、つまりとどめを刺した人に与えられる。しかし、このクエストのモンスターは特殊で、まず攻撃してもHPバーが減らない。そいつは出現時間に制限があり、その間に一番多くダメージを与えたパーティーのリーダーにアイテムがくる様になっている。単純計算、7人のフルパーティーでくる『軍』のパーティーにダメージで勝つことはできない。

「それも大丈夫だ。クライン達に応援を頼んであるからな。」

「クライン…って、『風林火山』の？」

「そ。まあ、それなりの代償は払ったけどな。だから大丈夫さ。」

「それなら…、大丈夫なのかな？」

ようやくリスも納得したらしい。しかしどこか不安そうに服を掴んでくる。そんなリスの不安を和らげられるようにぎゅっと抱きしめる。

「ごめん、どうしても必要だからさ。大丈夫、用が済んだらすぐ帰るよ。」

「うん…。気をつけて。」

そう言ってキスを交わすと、リスは目を瞑った。その口から落ち着いた寝息がこぼれるのを確認すると、俺も明日に備えるべく、眠ることにした。

第三話（後書き）

次はクラインと…、もう一人出す予定です。20も格下のクエにしたのは、ひとえにこいつを出すためだったりします。結構強引ですがね（^ー^；）

第四話（前書き）

一日一話とか無理ですね（^ー^；）

2〜3日に一話のペースでいけたらと思います。

それとも周1にして一話の文量を倍にした方が読みやすいんですかね…

第四話

「ポーション持った？食べ物持った？」

「もうインベントリ共有なんだけど…」

「それでも、一応確認するもんでしょ。」

「まあ、悪い気はしないよな。」

出発前の再確認。二人でインベントリの中を確認する。それを終わると俺は玄関に立つ。

「じゃあ…、そろそろ行かないと。」

「はい。キリトの剣。気合い入れて整備しておいたから。」

そういつて俺の二本の剣を渡してくれる。俺は黒い剣を格納し、白い剣を背中に提げる。

「ありがとう。じゃ、行ってくる。」

「うん、気をつけて。」

でる前にキスを交わして、俺は扉を開いた。

「おう、遅えぞキリト。」

「お前が早すぎんだよ、クライン」

待ち合わせの転移門に着くと、すでにクライン達ギルド『風林火山』の面々が揃っていた。

「そりゃあお前が恋人のために頑張るってんだ。俺らも一肌脱ごうって気になるだろうよ」

「じゃあ、報酬は結婚祝いの前払いということではないな。」

「それとこれは話が別だ。」

そんな感じでひとしきり雑談に興じていると、遠くから声が聞こえてきた。

「遅れてすみませ〜ん」

そう言いながらこちらへ向かってくるのはシリカと使い魔のピナだった。彼女とは35層の迷宮区で知り合った。俺は彼女を利用した形となったので嫌われたと思ったのだが、そういうことはなく、未だに友達付き合いが続いている。ちなみにリズに指輪を贈ることを勧めたのも彼女だ。結婚報告をしたときに言われたのだが、その時のやりとりは、

「じゃあ、当然指輪とかも用意してありますよね？」

「いやあ…特に考えてなかった。」

「何言ってるんですか！女の子としては結婚指輪はウェディングドレスと同じくらい憧れるものなんですよ！」

「そんなもんなの？」

「そうなんです！なんなら一緒に選んであげますから、一緒に買い物に行きましょう！」

「いや、さすがにそれは…」

たしかこんな感じだったはずだ。この後やたら一緒に買い物に行くことを主張されたが、さすがに迷惑になるので丁重に断った。そして、昨日報告したら、クエストに付き合ってくれるという。人数がいけないことには始まらなかったのをお願いした次第だ。ちなみに彼女がどれくらい頑張ったのかわからないが、そろそろ攻略組に入れるんじゃないかというほどのレベルに上がっていた。

「時間にはまだ余裕があるよ。今日から4日間よろしく。」

「は、はい！任せて下さい！」

シリカと話していると、あの男の横槍が入った。

「おいキリト。もしかしてこの子か？」

「ああ、この子がシリカ。短剣使いだ。シリカ、こいつはクライン・ギルド『風林火山』のリーダーだ。あっちにいるのはそのメンバー。彼らも一緒のパーティーだ。」

俺がそう紹介すると、野郎達は各々手を挙げたり、口笛を吹いたりして挨拶代わりにする。一人怪しい目つきをしているやつがいるが、それは無視する。対するシリカは卒のない笑顔を向けて

「初めまして。私はシリカといいます。この子は友達のピナです。」

そう挨拶する。それに合わせるように隣で浮かんでいたピナもきゅるつと鳴き声をあげる。そんなシリカを見てクラインは

「もうちょっと大きかったらなあ……」

なんてことをつぶやいていた。とりあえずクラインはどついてやり、

「さ、全員揃ったし、そろそろ行こう。」

俺がそう宣言すると、全員がそれに答えるように転移門へ歩き出した。

第四話（後書き）

俺の中ではクラインは女好きですが、ロリコンではありません（笑）
ロリコン案も考えたのですが、別にシリカとクラインをくつつけた
い訳じゃないので却下。

そしてリズキリ小説のはずなのにリズベットの出番ががが

第五話（前書き）

投稿が遅くなってしまった（^―^；）

まあ、土日は書かないのですが（笑）

戦闘描写難しい…

第五話

この層の迷宮区のは遺跡の様な感じになっている。そこに出てくるモンスターも岩で作られたゴーレムなどの物質系が多い。

「とまっているそばからか。」

前から向かってきたのは『ロックゴーレム』だ。ゴーレムは複数出てこない代わりに、他のモンスターよりパラメータが高く設定されている。特に攻撃力と防御力は3層は上のモンスター程度に設定されているらしい。

「じゃあさつさと片づけようか。」

そう言って剣を抜いて構える。

「はい。」

それに答えるようにシリカとピナもでてくる。

「俺らはいらんだろ？」

そう言ってくるのはクラインをはじめとする『風林火山』の面々。

「ああ、次頼む。」

この場所は通路が狭いため、3人も並ぶとほぼ身動きが取れなくなってしまう。

まあ、それ以前に俺のレベルなら一人で十分倒せるのだが。クライ

ンは怠けるように言うてはいるが、いつでも切りかけられるように刀の柄に手をかけている。そのあたりはさすがギルドリーダーか。

「キリトさん、きます。」

「まずは俺が行く。いいね。」

「わかりました。」

そう打ち合わせると、俺は前にでて相手の攻撃を誘い、体を引くタイミングを計る。案の定腕を振り上げて攻撃してくるゴーレム。腕が降りてきたタイミングで引くことで、攻撃を空振らせて硬直をつく。それをなんとか続けて、AIが学習してきそうなところで片手剣スキル『ヴォーパルストライク』を放つ。

敵の振り下ろしてきた腕とぶつかり、お互いに硬直が生まれる。そこで

「スイツチ！」

「はい！」

シリカが飛び込んでくる。短剣の突撃スキル「ホワイトバイト」だ。そこからシリカの連撃が始まる。

「えい、やあ、たあ！」

声は可愛らしいが、ゴーレムのHPはすさまじい勢いで減っていく。

「きゃあー！」

連撃の締めで敵にパリイされた様だ。互いのHPが減る。

「きゅるるる」

そこでピナがヒールをかけることによりHPが右端まで回復する。それを見ながら俺も間に入りとどめにかかる。その後俺が連撃をたたき込んでいる途中で敵のHPが尽き、俺のとどめの一撃は空を切った。

「ふう、お疲れさま。」

「やっぱりキリトさん強いですね。私なら後一度連撃を入れても倒せませんし。」

「いや、シリカも強くなったよ。ピナとの連携にもさらに磨きがかかったかな？」

「ふふっ。ありがとうございます。」

そう笑って答えてくれるシリカ。そして、

「キリトよ……。終わったならさっさと行こうぜ。」

恨めしそうに言ってくる男がいた。

その後は先頭を代えつつ先に進んでいく。

「こんな場所にでるなら月関係無い気はしますけど…」

「この遺跡を抜けた先に広場があつて、そこだけ月明かりが差し込む様になつてゐるからね。」

「なるほど…」シリカの疑問に答えたり、

「なあキリト。もしかして他にも可愛い女の子と知り合つてゐるんじゃないだろうな。俺らは友達だろう。隠し事は無しだぜ。」

「仮に知つても今のお前じゃ危なくて紹介できねえよ…」

クラインの話を流したり、

「キ…キミ…何歳？俺は…」

「えつと…その…」

「「こいつはだめだぁー!!」」

少々危ない奴をクラインと二人で殴ったりしながら歩いている内に目的の場所へたどり着いた。

「ここがゴーレムのポップ地点か…」

「なんだか不思議な場所ですね…」

「ここには他のモンスターは出ないらしいな。」

たどり着いた場所は遺跡の中央部。最深部にはこの層のボスがいた。今までは壁にある松明の明かりを頼りに進んできたが、ここには松明がない代わりに月明かりが降り注ぎ、青白い光に照らされている。すべては電子データだと分かつてはいるが、今までとは違う、静謐な空気に包まれている。

「さ、明日は『軍』と一悶着ありそうだし、今日は早めに寝て、明日に備えよう。」

「そうですね。」

「了解」

そして、野営の準備に取りかかった。

第五話（後書き）

あ、シリカのスキルについては俺のオリジナルです。書き間違いだったりしませんので。

スキル名を考えるのが一番難しいですな（＾|＾；）

第六話（前書き）

30分間指がノンストップで動きました。シリカの気迫に押された気がした…

第六話

適当に済ませた夕飯の後、クラインの提案で休む時は交代制に見張ることになった。たとえ安全地帯でも、圏外では警戒して過ぎることはない。二人一組（一人余るので一組は3人）の3交代制として、組み合わせはくじ引きで決定した。

「…チクシヨウ。」

うらめしそうにこちらを見ているクライン。

「お前が提案したろ…」

俺も朝からなにかと絡まれて疲れてきた。組み合わせは、（キリト・シリカ）、（クライン、ロリコン）、その他3人という結果だ。クラインがなにを考えているかは分かるが、交代する気にはなれなかった。

「じゃ、俺とシリカが最初見張るから、後からよろしく。」

「分かったよ…」

そんなやり取りがあり、今起きているのはシリカと俺だけだ。最初はぼつぼつと話していたが、今は会話も途切れ、ただ二人でランタンを囲んでいる。シリカの顔は伏せられているためによく見えない。しかしそこはかとなく赤くなっているようにも見える。そんな感じで観察していると、

「キリトさん。」

と声を掛けられた。

「ん？どうかした？」

「えつとですね…」

「あの」とか「その」とか煮え切らない様子で言っている。彼女の耳は最早真っ赤を通り越して湯気が出そうなくらいになっていた。そんな状態が数分続いたところで、シリカがぱつと顔を上げた。

「キリトさん！」

「はい！」

つい驚いて変な返事をしてしまった。しかしシリカは気にならないのか、そのままの勢いで続けた。

「あなたが好きです！！私とお付き合いして下さい！！」

俺の中で時間が止まった。彼女は今なんと言った…？

目を見開いたまま固まっている俺の様子を見かねたのか、シリカが

声を掛けてくる。

「あの…、告白しておいてなんですが、答えは決まっていますよね？」

その声で俺の時間は動き出した。

「うん…。ごめん。それは出来ないよ。大切な人がいるから。」

「はい、分かってます。」

そう言って微笑むシリカ。普段の明るい笑顔と違って、その顔は見とれるほどに綺麗だった。

「ならどうして…?」

「私の気持ちを知っておいて欲しかったからです。」

そこで一旦切ると、シリカは続けた。

「たとえばゲームでも、私は遊びで人を好きになったりはしません。私の本気を知っていてもらいたがったんです。だから攻略組に参加できるように頑張っ、そのうちキリトさんと一緒の場所に立てるように。」

彼女の顔は相変わらず笑顔だが、先ほどとは違って強い決意が伝わってくる。

「でも俺はリズが…」

「それはわかってます。今はそんな簡単に振り向いてもらえんとは

思っていないせん。」

けど、と彼女は続け

「現実に戻ったら第二ラウンド、はじめさせてもらいますからね。」

そんな宣言に俺は苦笑しながら返す。

「できれば、遠慮したいな。」

「拒否権、あると思います?」

「ない、だろうな。」

「よく分かってるじゃないですか。」

そう告げたシリカの顔は、いつものような明るい顔のようで、少しいたずらっぽさが混ざっていた。

ちなみに、このやり取りを聞いていたクラインとロリコンにさらに

絡まれることになったのは、この際蛇足だ。

第六話（後書き）

ここで切るか続きを書くか悩んだのですが、今までの文章量と、話題の切り替わりを考えてここで投稿することにしました。

クライン…；；

そしてロリコンに名前を付けようか思案中。よければ名前候補なんかを感想やメッセージにてもらえれば、オリキャラとして見せ場を一つくらいつくる…かも？

第七話（前書き）

スキルの名前が思いつかないので、ごまかしごまかしていきます（
| ^ ; ）

第七話

「起きろキリト！」

朝までの見張りを終えて、シリカと一緒に（もちろん別のテントを使った）眠っていた俺をたたき起こしたのは、起床アラームの緩やかなリズムではなく、もちろんここにはいないリズムの優しい声でもなく、一緒のパーティーの両手剣使い（ロリコン）の切羽詰まった怒鳴り声だった。

「どうした！？」

安全地帯と見張りがいることに気を抜いていたのか、接近アラームに気が付かなかった自分に舌打ちしつつ、剣を片手にテントを飛び出した。その先にいたのはトレードマークとなっている揃った装備に身を包んだ集団。

「軍のおでましか…」

クラインは先頭に立って軍の代表者と何事か話している。しかし両者の剣幕を見ている限り友好的な対話は望めそうになさそうだ。近づいてみると会話の内容が聞き取れるようになってきた。

「こういうのは早いもん勝ちだろ？」

「アイテムが欲しければ売ってやる。だからそこをどけ。」

「そついう問題じゃねえだろ！ふざけるのも大概にしやがれ！」

このままだと飛びかかりそうな勢いのクラインを止めるべく声を掛ける。

「クライン、いくらなんでも熱くなりすぎだ。」

「キリト…」

横槍を入れたことで冷静になったのか、こちらを向いてくるクライン。その様子を見て、とりあえずは大丈夫そうだと判断し、俺は相手に向き直る。

「君は？」

「俺はキリト。ソロだ。ついでに今はこのパーティーのリーダーでもある。」

「アインクラッド解放軍のライツ少佐だ。」

ライツはそう言ってこちらを見下ろすような格好をとる。俺もそれに答えるように下から睨み上げるようにする。

「で、そのライツさんがなんの用だ？」

「我々の狩り場を不正利用しようとしている輩がいるのでね。注意していたところだ。」

「我々の狩り場？」

「そつだ。この場所は我々の管轄下にある。勝手な行動は慎んでもらおう。」

「管轄下って…、まあいいや。明後日には帰るから大目に見てくれないか？」

「我々は明日のクエストこなすという任務あるのだ。それを妨害しないのであれば考えよう。」

「結局そこか。実は俺らもクエストアイテムが目当てでな。」

「アイテムが欲しければ軍本部に行けば販売しているぞ。」

「あいにく、『軍』の法外な値段じゃ買う気が起きなくな。」

「ならば諦めて立ち去れ。」

「…嫌だといったら？」

「実力行使も辞さない。」

その言葉で全員に緊張が走る。

「…といたいところだが、一応グリーンプレイヤーの様だ。ここは決闘で決めよう。私に勝てばこの場を譲ろう。そうでなければ立ち去れ。どうだ？」

そういつて手に持ったハルバートを構えてくるライツ。俺は背中の剣を抜いてそれに答える。

「いいぜ。場所はここでいいか？」

「ほう、躊躇せずにかかってくるか。よほどの馬鹿か、あるいは…」

「御託はいいからさっさと始めるなら始めよう。正直眠いんだ。」

「わかった。では。」

そう言っただけでウィンドウを操作するライツ。すぐに目の前に決闘を受けるかどうかのウィンドウが浮かんできたのでOKボタンを押した。その瞬間

「はああああ！！！」

真正面から突いてきたハルバートを反射的にかわす。そこから反撃に移ろうとするとそれを許さないように続くライツの連撃が迫る。それらを受け流し、敵の硬直を狙ったが、

「遅い」

その声と共に右から敵の刃が迫った。その軌道に反射的に剣を置く。同時に武器がぶつかり合う甲高い音と共に止めきれなかった勢いのまま、吹き飛ばされた。

「ほう、よく止めたな。さすがは『黒の剣士』。」

俺を吹き飛ばしたままの姿勢で声を掛けてくるライツ。

「いや、かなり危なかったよ。正直間に合ったのは運が良かった。」

俺は倒れたまま、ウィンドウを操作する。

「どうする？降参するか？」

「冗談…。」

操作が終わったウィンドウを閉じて立ち上がり、

「バレてんなら隠す必要もないよな。」

両手に持った剣を構える。

「『二刀流』か…、いいだろう。」

そう言っただけで再度ハルバートを構えるライツ。俺たちの間に緊張が走り、その緊張が限界を迎えると同時に、俺は駆け出した。

第七話（後書き）

二刀流キリト君は次話持ち越しで（^ー^；）

さて、ヒースクリフ戦でも読み直すか…

第八話（前書き）

一応最終話ですが、うまく話をまとめることが出来ずいつもの倍以上の量に…

第八話

ライツの突きを右手の剣で受け流す。それと同時に左の剣を突き出す。しかしリーチの差でギリギリバックステップで距離を取られる。

「その長いリーチ、やっかいだな。」

「攻防を同時にこなせるそのスキルも優秀だ。」

言葉を交わし終わるとまた同時にぶつかり合う。二刀流突撃技『ダブルサーキュラー』と、向こうの『レイトラスト』。両者の技がぶつかり合い、互いのHPを削り合う。その後も俺は奴の攻撃を受け流しては反撃し、奴は反撃をリーチ差から来る時間的余裕を最大限利用し回避する。互いが致命的ダメージを与えずにいた。しかし、俺にはあまり時間は残されていなかった。

「そろそろ体力が心許ないのではないのか？」

「ご心配ありがとうよ。」

俺は先ほど吹き飛ばされた分だけ余計にHPが減っている。このままHPの削りあいとなれば、先にHPが尽きるのは俺だった。

「はあ！」

もう何度目かも知れない奴の突き。俺はそこを片手で受け流さずに、両剣を交差させたあたりで受け止めた。

「むっ」

「たああああ！」

俺はそこから奴の武器を跳ね上げて接近。最上級連撃『スターバースト・ストリーム』を放つ。その連撃に、長い獲物をもつライツが、至近距離のこれを凌ぎきれぬかが、勝負の鍵だ。

後三撃

後二撃

後一撃

「だあああ！！！」

スキルを出し終えたが、奴にはついに直撃をあてることが出来なかった。敗北を覚悟すると同時に目の前にウィンドウが現れる。そこに書かれていたのは俺が勝利したというものだった。

「あれ？」

思いがけない結果に呆然としてしまう俺。

「なにを呆然としている？勝ったのならそれなりの態度でいて欲しいものだが。」

つい先ほどまで俺と闘っていたとは思えないくらいしっかりと立ち、ポーシオンを飲みながら俺に声をかけてくるライツ。

「俺は勝ったのか…?」

思わず目の前の男に尋ねてしまう。

「君より先にこちらのHPがイエローゾーンに入っただけだから。」

と、こともなげに答えるライツ。一撃決着のルールがなければこちらの勝ちだった。と付け足してくるあたり納得はしていないようだ。

「どうあれ負けは負けだ。今回は譲ろう。」

「案外あっさりと引き下がるんだな。」

「こちらが決闘で決めようと言っただけ。約束は守る。」

そう言ってこちらに背を向けるライツ。

「しかし、次は負けん。」

そしてそのまま、仲間を引き連れて去っていった。

そのまま『軍』の奴らが立ち去っていった方を見てみると、後ろからすごい勢いで叩かれた。

「よくやったキリトオー!!」

「あんまり強く叩くな、HPが減るじゃねえか!!」

そう言っただけで手を払う。

「どうせバトルヒーリングですぐ回復するじゃねえか。ケチケチするな。」

「あのなあ……」

「さすがキリトさんですね!さらに好きになりそうです!」

そう言っただけで左腕に抱きついてくるシリカ。一瞬良いかな……と思ってしまったが、リズへの罪悪感がその気持ちを綺麗さっぱり流してくれたのですぐにシリカから離れる。

「ありがとう。でもルールが無けりゃ負けてたから……。」

「ルールでもなんでも、勝ち負けは勝ちですよ!」

「まあ、そうなんだけどさ……。」

そこから他のメンバーからの祝福?を受けることになり、なぜか手持ちのアイテムでプチパーティーまで開いてしまった。そのパーティーが終わった後は全員気を失うように落ちてしまい、気が付いたらゴーレムが出現30分前で全員が飛び起きて、慌てて準備するこ

とになってしまった。

ゴーレム戦は、競争相手もいなかったので、全員で攻撃してはスイッチを繰り返し、『エヴァーラスティング・ストーン』を簡単に入手することに成功した。

そのままの足で街へ戻り、俺はみんなへのお礼のレアアイテムを渡すと、あいさつもそこにエギルの店へ向かった。もう一つのアイテム、『クリスタライト・インゴット』を手に入れるためだ。

店に着くと、エギルがいつものようにあくどい商売を行っていた。

「ローガーディアンの破片4つで3000コル！」

「4つで5000コル！」

「3500！」

「4500！」

「4000!!」

そう言い切るエギルの迫力に勝てなかったのか、少しでも首を縦に振ってしまう片手剣士。エギルがそれを見逃すこともなく、相手の頭をバシバシ叩いて

「よっしゃ決まりだ！4つで4000！」

ちなみに『ローガーディアンの破片』は優秀な防具を作ることが出

来る素材アイテムで、相場は確か一つ2000くらいのはずだ。

俺はエギルに近づいて声をかける。

「あくどい奴だな。相場の半額だぞ?」

「ん? ああキリトか。注文の品はもうキープしてあるぞ。」

そう言ってアイテムを実体化させる。その手に現れたのは、リズと一緒に取りに行ったこともある、見覚えのあるものだった。

「お前が入手方法を公開したおかげでこいつもずいぶん手に入れやすくなったもんだ。」

そう言ってアイテムをトレード欄に入れてくる。俺も代金分のコルを入力し、決定ボタンを押す。

「まいどあり。じゃ、さっさと帰ってやんな。愛しのあの子の元へ。」

そうニヤリとわらいながら告げてきたエギルをとりあえず叩くと、俺はそのままエギルの店の二階へ向かった。

飛ぶようにリズの元へ向かう。敏捷性スキルを存分に発揮し、店の二階から飛び出すと、猿よろしく屋根を飛び移りながら移動する。目下に目的の店が見えるとすぐさま飛び降り、目の前の扉を吹き飛ばす勢いで開ける。

「ただいま! リズ!」

「おかえり！キリト！」

迎えてくれたリズをすぐさま抱きしめた。しばらくそのままの姿勢でいたが、お互いが満足したあたりでどちらからともなく離れる。

「さっそくで悪いんだけど、ちょっと付き合っただけいいかな？」

「えっ？帰ってきてすぐに出なくても、少しくらい休んだら？」

「どうしてもすぐに行きたいんだ。今日の仕事は？」

「今日のはもう終わってるけど……。」

「じゃあ決まりだ！行こう！」

「えっ？あっ？ちょっとキリト？！」

リズベットの手を握ると、俺は再度街へ飛び出した。目的地はもちろんアシユレイの店だ。

「おい！言われたものもってきたぞ！早く作ってくれ！」

「ちょ、キリト？どこどこ？」

俺は店に踏み込むと大声でアシュレイに呼びかけた。事情を分かっ
ていない（教えていない）リズベットは戸惑いを隠せないようだ。

「おい！アシュレイ！いないのか！？」

「えっ？アシュレイって？あの？」

戸惑うリズベットを余所に、俺はアシュレイを探す。

「おい、アシ」

「うるつつつつつつさい！！！！！！」

俺の声を文字通り吹き飛ばすようにして店の奥から出てきたのは先
日見かけた服とはまた違ったものを着ているアシュレイだ。しかし
その顔はこれ以上ないほどに不機嫌そうにゆがめられている。

「ギヤーギヤー騒ぐな。叩き出してやろうか。」

「指輪さえ作ってくれば叩き出そうが何しようがかまわないさ。」

「もう…、アスナの紹介じゃなきゃほんとに叩き出してるのに…。」

そういつて舌打ちするアシュレイ。その様子を見ていたリズがおそ
るおそるといった感じで声をかけてくる。

「ねえキリト、この人誰？アシュレイって言ってたけど、あのアシ

ユレイさん？」

「たぶんリズの考えてるアシュレイで合ってるんじゃないかな。少なくとも俺はアスナにそう言われた。」

「それはとりあえずわかったけど、指輪？一体どうなってるの？キリトが最近泊まりがけで狩りしてたのに関係してるの？」

「ああ、それは後で説明するよ。ちょっと待ってて。」

そう言っただけ俺はアシュレイに向き直る。するとさらに不機嫌そうになったアシュレイがいた。

「あたしを呼びつけたくせにさらに待たせるって？ほんとに放り出すわよ。ていうかもう限界。放り出してやる。」

そう言っただけ威圧感たっぷりに近づいてくるアシュレイ。さすがにまじりで、なだめることにする。

「わ、悪かった。謝る。だから指輪を作ってくれ。」

その謝罪がよかったとは思わないが、アシュレイは頭を掻きながら、

「仕方ないわね…。さっさと物出しなさい。」

そう言っただけ手を差し出してくる。その手に俺は『クリスタライト・インゴット』と『エヴァーラスティング・ストーン』を渡す。それを受け取るとアシュレイは後ろへ歩き出し、

「んじゃ、あたしは作ってくるから、あんたらは適当に時間潰して

なさい。」

そう告げると奥へ引っ込んでしまった。残されたのは俺と、事情が全く飲み込めていないリズベット。

「で、こういうことが説明してくれるのよね？」

そう聞いてくるリズベットに俺は、どこから説明するべきか考え始めるのだった。

リズベットへかいつまみながら最近の話を教える。そうしているうちに奥からアシュレイが戻ってきた。

「ほら、出来たわよ。」

そう言っ指輪を投げてくる。俺がそれを掴むのを見届けると、寝る、と告げて奥へ引っ込んでしまった。俺は手元にある指輪へ目を向ける。銀と青の模様が交差している。結婚指輪ということで、宝石のたぐいはついていない。遠目から見るとシンプルだが、手の中にあると所々に細かい装飾が施されており、制作者の技術の高さが出がえる。

「それがキリトの欲しかったアイテム？うわぁ…、綺麗…。」

指輪を見ていると横からリズベットがのぞき込んできた。俺はそのリズベットに向き直る。

「なぁ…リズ。」

「ん？」

「これ…」

そう言っでリズベツトへ指輪を差し出す。リズベツトは最初はぽかんとしていたが、意味を理解したのか、赤くなってうつむいてしまう。

「これって…。」

「うん…。結婚指輪だ。」

そう告げるとリズベツトはさらに赤くなり、感情表現用のプログラムの最高値ではないかというほどになってしまった。しかし俺もかなり赤くなっていることが自覚できる。

「じゃあ、手を…。」

「あつ…」

俺はリズベツトの手を取ると、その手の薬指に指輪をはめる。指のサイズは聞いていなかったが、なぜかサイズはぴったりだった。

「これから、よろしく。」

そう言っで、リズベツトは最高の笑顔で答えてくれた。

第八話（後書き）

本当のあとがきはこれから次話投稿でかきます。

あとがき

というわけで、S A O二次創作「君に、指輪を」どうだったでしょうか。まあ…通勤の暇に書いたお手軽かつ初めての複数話投稿なわけで、反省点は多々あるわけですが（＾―＾；）

S A Oの知識が足りていない

いやあ、本編でちゃんと描写されているものののに、思いこみで書いてしまっているところが多々ありますね（＾―＾；）決闘とか。これはもっとたくさん読むしかないですな…。

話のまとめるタイミング

七話と八話ですが、七話を書き終えた時点ではもっと長くキリトのデュエルを書く予定だったのですよ。でもふと考えて

「あれ？リズ出番少なすぎね？」

と思い急遽削減。そのせいで最終話ネタもひっぱってこざるをえず、最終的に七話終盤＋最終話というアレな話になってしまいました…。

リズベット小説？

リズ出番少なすぎだろう！！

こう言うのはもっとたくさん書いてから番外編的に書けば良かった

ですね（＾―＾；）

総括

まだまだ直すべき点多すぎると言う（＾―＾；）

ここに上げた以外にもいろいろ表現方法等、気をつけるべき点はたくさんあると思います。そこはこれからちよくちよく書いていく内に少しでも上達することができればと思います。

さてさて、次こそはリズキリな小説を書ければなと思います。二人に小旅行？でもさせてみましょうかね。どうせ時系列とか（ry

妄想が続く限り書いていこうとは思いますが、よければまた付き合ってやって下さい（＾―＾；）

それでは、最後になりましたが、私の様なド素人の小説を読んで下さった皆様方、SAOという素晴らしい作品を世に送り出して下さった川原礫様に感謝の辞を述べて、あとがきとさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2841n/>

君に、指輪を

2010年10月9日14時09分発行